Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

スピーキング・テストの「つぼ」

根岸 雅史 Negishi Masashi
（東京外国語大学）

これまでこの連載では，スピーキング・テストのテスト手法や採点方法を取り上げてきた。今回は，これまで扱えなかったスピーキング・テストの「つぼ」をまとめてみる。

1．スピーキング・テスト実施の心得

まず，スピーキング・テストを実施する際に必要な心得をまとめてみる。

「聞いているよ」という雰囲気を醸し出す

スピーキング・テストの受験者は不安なものである。そのような場面では，インタビュアーは，受験者の話を「聞いているよ」という雰囲気を醸し出すことが重要だ。何人もの受験者のインタビューを行っていて，退屈しているというような態度は慎まなければならない。

受験者に聞いていることを伝えるためには，インタビュアーは，受験者との適度なアイコンタクトをとることを忘れてはいけない。通常の状態であればアイコンタクトを忘れない教師であっても，スピーキング・テストの場面では，名簿やら受験者に見せる絵やらロール・プレイング・カードやらの整理に追われて，受験者の目を見なくなってしまっていることがあるので，注意が必要だ。こうした準備は，それぞれのテストが始まる前にしておかなければならない。

発話を促すことばを挟む

受験者を励ますような雰囲気を醸し出すことも大切である。“umm”“aha”“right”“oh, I see”などのことばを適宜挟むことで，話し手は気持ちよく話せるはずである。決して，受験者のことばを途中で遮ったり，受験者が言いかけた文をインタビュアーのほうで完結させたりしてはいけないだろう。

母語で問題なくできるようなタスクを課す

英語のスピーキング・テストを行う場合，意外と言語以外の面で過度な要求をしていることがある。テストを作成したら，そのタスクを母語で行った場合に受験者が遂行可能かどうかを確認するとよい。母語でそのタスクを遂行させた場合に，そのできに学習者間で差があるようであれば，そのタスクは見直すべきであろう。

「仕切り直し」をたくさん用意する

スピーキング・テストにいくつかのステージがある場合，それらが相互に依存しないようにしなければならない。つまり，あるタスクができないことが，次のタスクの遂行に影響しないようにすることである。そのためには，いくつもの「仕切り直し」をテストの中に用意しておくのがいい。

「本当の質問」をする

いいインタビュー・テストのためには，見せかけの質問（display questions）ではなく，本当の質問（genuine questions）をするべきだとされる。自分の学校の生徒に対するインタビューのときなどは，名前や年齢，学校，住んでいるところなどは既知の事柄であり，これらについて尋ねることは現実のコミュニケーションとしては意味がないだろう。

wh- 疑問文を用いる

質問をする場合に，yes/no 疑問文を用いてしまうと，yes/no だけで会話が終わってしまう。この

ため，なるべくwh-疑問文を用いるのがいいだろう。また，仮にyes/noで答えたような場合でも，“Why do you think so?”などのフォローアップ・クエスチョンをするとよい。

インタビュアーは話しすぎない

スピーキング・テストに積極的に取り組む教師の中には，自分自身が英語を話すことが得意で，楽しいと感じている人が多いだろう。これ自体は，英語の教師としてとても大事な資質であるが，スピーキング・テストの実施の際には少し気をつけなければならないことがある。それは，「話しすぎ」である。自身が英語を話しすぎる教師は，スピーキング・テストの本来の目的である「受験者に話させる」ということを，ともすれば忘れてしまうのである。インタビュアーとして理想的なのは，できるだけ少ないことばでできるだけ多くの英語を受験者から引き出すということである。例えば，“So?”“And (then)?”“Why?”“Tell me more.”“What do you mean?”などはいずれも短いことばであるが，受験者から多くを引き出すことができる。こうした「魔法のことば」のストックをたくさん持っていることは重要である。

「誤り」の訂正をしない

スピーキング・テストを実施すれば，受験者はさまざまな種類の「誤り」を犯すことになるが，このような場合に，訂正をしないことが重要である。訂正をすることで受験者を萎縮させたり，受験者がそこから学習してしまって，本来の能力を見られなくなってしまったりすることがあるからだ。誤りがあった場合には，自然にやり過ごすか，意味の確認が必要であれば，“You mean,...?”などと言って確認すればよいだろう。また，受験者の発言を評価するようなことばの使用も避けるべきとされている。

インタビュアーと採点者を別にする

インタビュー・テストでは，試験官がインタビューをしながら採点をすることがある。しかしながら，インタビューを実施しながら信頼性の高い採点を行うことは思いのほか難しい。同時に二つのことをすれば，どちらかがおろそかになってしまうものである。ALTがインタビュアーとして確保できるような場合は，日本人教師のほうは採点に徹するというように，役割を分けたほうがよい。

2．ダイアローグかモノローグか

スピーキング・テストとなると，まず頭に浮かぶのがインタビュー・テストであろう。しかしながら，英語を話す場面というのは，ダイアローグの場面だけではない。話し手が一人で，ある程度の時間話し続けるモノローグの場面もある。いわゆる，スピーチやプレゼンテーションの場面だ。

ダイアローグの能力とモノローグの能力は，厳密には同一でない。ダイアローグでは話し相手とのやりとりが必要となるのに対して，モノローグでは始めから終わりまで一人で話し，その中での一貫性が重要となる。したがって，そのときの指導目標によく照らして，より適したほうを選択することが必要である。単に，スピーキング・テストといえばインタビューと画一的に考えると，指導目標とのずれが生じることがある。

スピーチやプレゼンテーションによる評価は，テストとしてというよりは，日常の授業の中で行われることが多いだろう。このような評価活動の場合は，原稿をあらかじめ準備してそれを暗唱するような活動であるために，その結果は即興で話す能力や会話でのやりとりの能力とは必ずしも一致しないということを心に留めておくべきである。

また，ダイアローグのテストというと，教師による生徒へのインタビューをイメージしやすいが，生徒どうしの会話によるテストという手法もある。生徒どうしによる会話では，一方が質問してもう一方がそれに答えるというように役割が固定しているわけではないので，質問したり答えたりという相互のやりとりが期待できる。生徒どうしによる会話には，このようなさまざまなメリットもあるが，日本人学習者の場合は，うまくやらないと，単に教師と一対一で話す集団面接になってしまうことがあるので注意したい。これを防ぐには，生徒どうしが話し合わなければ解決しない課題を課したり，教師は司会者のような役割を担って，生徒どうしのやりとりを促したりするとよいだろう。